

実践編⑦

子供の多様性を前提に
「学び続ける子供」を育てる！
天童市立天童中部小学校の挑戦

一人で、粘り強く、最後まで探究する 「フリースタイルプロジェクト」



【実践編⑦】

一人で、粘り強く、最後まで探究する「フリースタイルプロジェクト」

～子供の多様性を前提に「学び続ける子供」を育てる！

天童市立天童中部小学校の挑戦～

天童市立天童中部小学校は、「学び続ける子供の育成」を研究主題として、全ての子供が自立した学習者として育つことを目指しています。「仲間と教師が創る授業（いわゆる通常の授業）」の他に、「自学・自習」「マイプラン学習（単元内自由進度学習）」「フリースタイルプロジェクト（個人総合）」といった特徴的な学習形態を複合的に組み合わせて、学習者である子供が主体となる授業を実践しています。

本記事では、その中でも、「フリースタイルプロジェクト」を取り上げ、授業実践やインタビューから、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を図るためのヒントに迫っていきます。

1. 取組のポイントと経緯～「フリースタイルプロジェクト」とは？～

天童中部小学校が行っている「フリースタイルプロジェクト」は、突然始まったわけではありません。子供の主体性を大切にしたい教育の実現を目指し、授業における子供の自由度を徐々に高める過程で、次のような学習形態の研究に順次取り組み、導入を進めてきました。

① 「子供が主導して行う授業」

子供主体の授業に変えていくために、まずは教師が子供の前に立つことをやめてみようという発想から生まれた授業スタイルです。事前に教師と子供で授業のめあてや授業を進める際のポイントについて打合せを行った上で、子供が進行役を務め、発問や指示、板書などを子供自身が行います。

② 「マイプラン学習」

子供の自由度を高め、学び方や時間・ペース等を一人一人の子供が決める授業スタイルです。全学年で各学期1回ずつ、国語・社会・算数・理科などから複数教科を組み合わせ実施しています。教師は単元のはじめに学習の手引きを基にガイダンスを行い、子供が見通しをもって学べるようにした上で、子供は数時間分の学習計画を立て、自分なりに学習を進めます。学習する順番や学習する環境を自分で選択しながら、学びを進めていきますが、多様な特性を持つそれぞれの子供の学びが深まるように、教師は様々な

学習材料を子供たちに提供するなど、学習環境を整えます。

③「フリースタイルプロジェクト」

子供の自由度をさらに高め、学び方に加えて学ぶ内容も一人一人の子供が決める授業スタイルです。4～6年生が前期と後期それぞれ 20 時間ずつ、「総合的な学習の時間」の中で実施しています。子供は自分の興味・関心を基にテーマを設定し、学びの進め方や時間・ペース、活動場所等すべてを自分で決めます。

これらの特徴的な形態の授業は、時数としては授業全体の 2 割程度で、8 割は通常の授業です。この 2 割程度の自由度の高い学びを充実させることで、子供に自ら学ぶ力を育み、通常の授業においても子供達が主体的に学ぶ姿が見られているといえます。

2. 「フリースタイルプロジェクト」の学びづくりのポイント

「フリースタイルプロジェクト」は、4 年生以上が前期・後期 1 回ずつのサイクルで実施しています。1 サイクルは 10 回（2 単位時間（90 分）を 1 回とする 20 単位時間分）の授業から構成されており、およそ次のようなポイントで進めています。

①テーマ設定・学習計画の立案

子供たちは教師と相談しながら、自分の興味・関心や今までの経験を基に取り組むテーマを設定します。なかなかテーマを決められない場合は、先生と何度も相談します。学習に必要な材料・道具等も基本的に子供自身が準備することになっています。また、テーマや探究プロセス、学び方によって活動場所も自分で決め、学習計画を立てます。

②プロジェクトチームによる合同会議

4～6年生の全体の計画や運営は、教員側のプロジェクトチームと子供側のプロジェクトチームの合同会議によって行います。「フリースタイルプロジェクト」がよりよい活動になるように、身に付けたい力、活動で留意することや約束事などを教師と子供が話し合い、全体の方針を決定します。



合同会議の様子を伝える掲示写真

③基本は「自分で学ぶ」

子供は学習計画を基に、まずは「自分で学ぶ」ことを大切にします。個人で活動する中で必要と感じた時に友達に働き掛け、互いに話し合ったり協力し合ったりすることは許容されますが、可能な限り自分で学びを進めます。また、教師に支援してほしいと子供が感じた場合は、子供が自ら交渉して支援を受けます。

④ICTの積極的な活用

子供は自分の学びを支える日常的なツールとしてICTを積極的に使います。端末の機能やアプリを使ったり必要な情報にアクセスしたりします。子供は「いつでも」「どこでも」「どのようにでも」端末を使うことができます。

⑤教師も「フリースタイルプロジェクト」

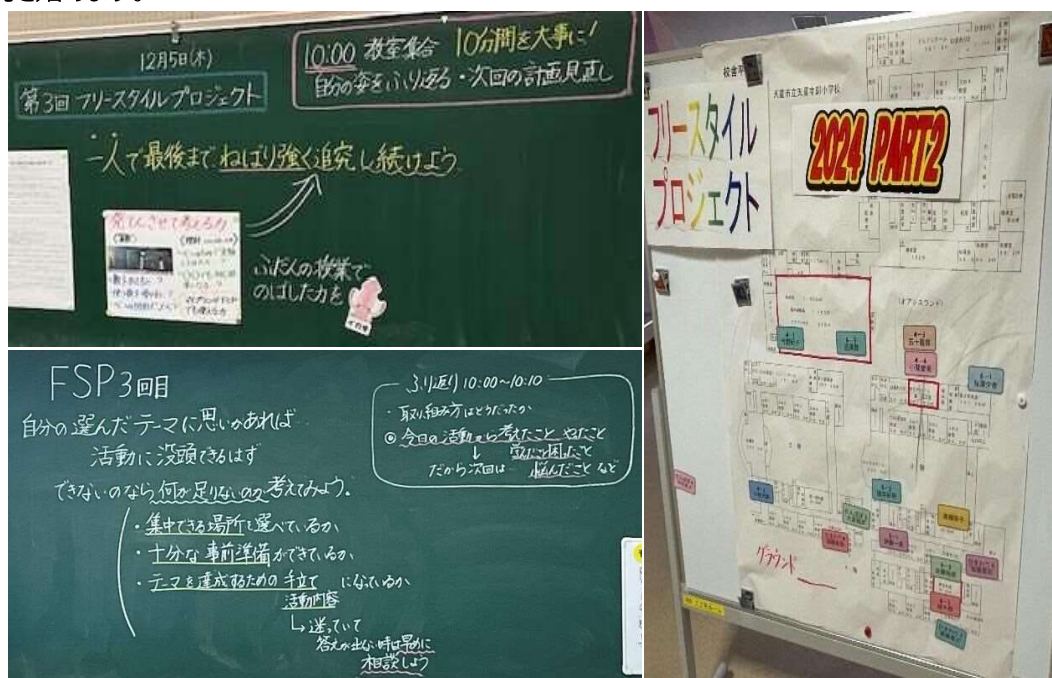
子供たちが活動中、教師も自分のテーマを決めて「フリースタイルプロジェクト」に取り組みます。教師も子供にとっての学習環境ととらえ、子供たちと同じように没頭して取り組んでいる姿を見せます。

⑥学習のまとめ「学習報告会」の実施

学習の最後はそれぞれの学びを報告会で伝え合います。全員のテーマや発表場所などは端末を通じて共有され、子供は自分たちでスケジュールを決めて発表を見合います。この報告会には3年生も参加して次年度の参考にします。

3. 実際の授業のワンシーン～とことん自分で学ぶ～

後期に入って3回目の「フリースタイルプロジェクト」が始まります。各教室の黒板には教師から子供たちへのメッセージが示してあります。子供たちはそれぞれが活動したい場所へ移動し、自分の学習計画に沿って探究を始めます。



各教室の黒板に書かれた教師からのメッセージと会場図

ある子供が熱心にタブレット画面を見ながら画像に何やら書き込んでいました。画面には自転車の画像が映し出されています。遊びに行く時にいつも使っている自転車。自転車に乗っているとき、「どうしてペダルを漕ぐとタイヤが回ったり、ギヤを変えるとペダルの漕ぎ具合が変わったりするのだろう？」という疑問をもったそうです。この疑問を基に「自転車のしくみ」をテーマにしました。この日は、自転車のチェーンに注目し、その役割について考えることで自転車のしくみを明らかにしようとしているところでした。学校の授業では端末を活用して調べたりまとめたりするとともに、家庭では実物に触れながら自転車のしくみを研究しています。



端末を使って「自転車のしくみ」を考える子供

家庭科室では、たくさんの子供たちが調理系のテーマで活動していました。その中で、黙々と作業する子供がいました。そば粉をこねていたのです。家庭で一度、手打ちそばを作った経験があり、とても楽しかったそうです。この経験から、もっと美味しいそばがつかれるように練習したいと思い、「美味しいそばをつくる」というテーマを設定しました。端末を使って水分量やこね方のコツなどを調べながらそば粉を一生懸命にこねます。そば粉や麺棒など必要な材料や道具を自分で用意してこの日に臨んでいます。



美味しいそばを目指してそば粉をこねる子供

この他、子供たちがテーマに扱う題材は、「言葉調べ」「イラスト制作」「裁縫」「縄跳びの三重跳び」「けん玉」「ダンス」「工作」「ミステリー」「あやとり」「デッサン」「習字」「ギター」「漫画」などなど。教室、家庭科室、音楽室、体育館、廊下といった複数の場所で子供たちの多種多様な活動が行われていました。



夢中になって多種多様な探究活動に取り組む子供たち

この間、教師自身も自分の決めた活動に取り組んだり、担当する場所で活動する子供たちの様子をじっと見守ったりします。また、子供からの求めに応じて、その子の学習状況やそれまでの学びの足跡を踏まえて、あたたかく支援していました。



子供からの求めに応じて支援する教師

授業の終了 10 分前になると、子供たちはこの時間の活動をじっくりと振り返り、振り返りシートに記入し、活動を終了しました。

4. 授業づくりのポイント～授業＆鈴木主幹教諭・小林教諭インタビューより～

（１）思いや願いに根差したテーマ設定

およそ 90 分間、集中を切らずに最後までじっくりと学びを進めていた子供たち。このような学びのエネルギーが生まれるのは、学ぶ内容を子供自身が決めていることに一つの大きな要因があるようです。個々のテーマ設定に当たっては、子供は教師と相談して決めています。単に「相談に乗る」というレベルではなく、教師は子供の日記の話題等から子供の内にある興味・関心を掘り起こします。その上で、子供一人一人と面談を行い、子供自身がテーマとする対象への思いや願いを自覚できるようにします。このような相談を経て最終的には子供自身がテーマを決定しています。「自転車のしくみ」「美味しいそばをつくる」といったテーマも、その子の生活経験に基づいた、その子なりの思いや願いに根差しているのです。一人一人の文脈に沿って決めたテーマだからこそ、子供は自分の学びに対して意欲を持続けることができるのでしょう。

（２）学び方を学ぶ

子供は自分で決めたテーマのもと、各期（計 20 時間／10 回）のはじめに、各回のおよその活動内容を決めていきます。そして、各回に取り組む内容に応じて、扱う資料や材料、使用するツール、費やす時間やペース、活動場所など、学びを進める上で必要なことをすべて決めていきます。

このようなことができるようになるには、経験が重要です。天童中部小学校では、次の年から「フリースタイルプロジェクト」に取り組む 3 年生の「総合的な学習の時間」で、次年度を見据えて探究のプロセスを意識した学び方を学びます。これを基礎として、4 年生からの「フリースタイルプロジェクト」に取り組みます。そこで大事にしているのが、めあてと振り返りです。子供は、各期のはじめにテーマを追究するに当たっての活動のめあてを立てます。また、各回の授業の最後 10 分間は活動の振り返りに費やします。学んだ内容とともに、

学び方についてもじっくりと振り返り、次回の活動計画に活かしていきます。各回の活動中もちろんですが、10 回にわたる活動スパンの中で子供たちは試行錯誤を繰り返しているのです。また、各期の最後にも、活動を通した自らの成長を振り返ります。

こうした学びの経験の中で、子供は自分の学びに対する責任を育みながら、学びを計画する力や学びを調整する力を身に付けていくと言います。

R6 年度 後期フリースタイル・プロジェクト 計画・振り返りカード	
名前	
テーマ 天童市の工芸品の将棋駒のことを調べて、実際に彫り、みる。	後期 フリースタイルプロジェクトを振り返って
テーマにのめり込んで思いやり、どんな力を身につけたのか、どんな自分になりたかったのか、など。 国語×社会の「工芸品」のペンキで、自分が「職人に会いたい」と思って、実際に聞いてきました。そして、親が「これは社会なので、何回も言うのでこのテーマにしました。やることは、駒を彫ること、また新たに調べて、つい忘れないうちに実際に彫り、みる。 前期のフリースタイルから後期に変わって、学びの力、活動の力、自己表現の力、など。 前期はレジンや、たけのこ、まめ、写真などのものをわすれたりして、ゴチャゴチャになったので、しっかりまめ、ようと思ひます。	後期 フリースタイルプロジェクトを振り返って、今回のフリースタイルはとてむずかしかったと思います。 理由は、駒を彫るとき、ロケットがぐちゃぐちゃになるし、将棋駒を彫るとき、木がたたくて彫りにくいなど、自分ではまだかいていなくて、たたくて、あつたからです。でも、よかったことは、「集中力」と「まめ」です。彫り作業をした8時間(4回分)は、駒を彫る楽しさとむずかしさ、とても集中できました。まめなのは、し料をまめしているとき、自分でもまめ方がうまくなっていることが分かって、昔にくらべて成長したと思います。そして今日の発表会は前期よりもうまくいったと思います。いろいろな人に、たくさん聞かれて、答えるのが大変でした。たくさんの人に発表を見てもらえて、うれしかったです。来年は、うまくなりたいように、テーマ、し料、発表などを工夫して、みんながきいてもらえるように発表にしたいです。

4 年生の後期振り返りシート

(3) 子供をよく見て、信じて待ち、価値付けることの大切さ

天童中部小学校に異動してきた先生方の中には、子供が学びのすべてを自分で決めるということに対して、「本当に力がつくのか」と心配になる場合もあるそうです。しかし、実際に取り組んでみると、自分で立てた問いに対して存分に追究する子供たちの姿を目の当たりにし、取組の価値が分かっていくといいます。「教師の意識を変えるのは子供の姿」と、これまで校内の取組をリードしてきた鈴木主幹教諭は、取組の手応えを肌で感じることの重要性を強調します。

もちろん、子供が立てる学習計画は、大人目線で見ると見通しが甘かったり内容が曖昧に見えたりするケースもあります。しかし、「子供は自分で考え、試行錯誤する中で、知識を得て、思考を回して、自分で学びを深め、学ぶに向かう力を高めていく」という学習観を大切にしているそうです。だからこそ、学び手としての子供を信じ、成果を急がず、子供の学びの過程にどのような意味があるかを見取り価値付けることが教師の役割と考えているのです。

5. 学校全体で取り組むポイント～石澤校長インタビューより～

子供が学びの主体となる特徴的な授業スタイルを実践している天童中部小学校。しかし、石澤校長は、大切なのはスタイルや型ありきではなく、「学び続ける子供を育てる」という理念だといいます。社会が急激に変化する中で子供も変わり、授業や学びのスタイルはあくまでも子供に合わせて進化させていくべきだと考え

ているからです。そのため、特に「フリースタイルプロジェクト」や「マイプラン学習」のような自由度の高い授業について、全ての子供にとって価値ある学びの経験となっているかどうかを教師が十分に見取り、振り返り、絶えず取組のブラッシュアップを図っています。

また、複数の特徴的なスタイルの授業実践を継続・発展させていくためには、授業を構想・準備したり実践を振り返ったりする十分な時間の確保と教師のモチベーションの維持・向上が欠かせません。天童中部小学校では、学校教育目標と子供の実態を基に、子供の思いも反映しながら、学校行事を精選するなど教育課程全体を見直し、特に授業時数に着目して週時程を工夫することで、これまで以上に放課後の時間を生み出しています。令和6年度からは、委員会活動とクラブ活動を除いて毎日5校時までの時程を編成しました。

「生きる力」を育む教育課程の創造

	月	火	水	木	金
8:10~ 8:35	朝の会 おたずね・フリートーク				
8:35~ 9:20	1校時 (3M)				
	移動・準備				
9:25~10:10	2校時 (3M)				
10:10~10:25	中間休み				
10:30~11:15	3校時 (3M)				
	移動・準備				
11:20~12:05	4校時 (3M)				
12:05~12:45	給食				
12:50~13:05	昼休み	清掃	昼休み	昼休み	清掃
13:10~14:10 (クラブ・委員会活動3M)	5校時 (4M)				
	移動・準備				
14:25~15:10	6校時 (委員会活動4M) (クラブ活動4M)		6校時 (委員会活動4M) (クラブ活動4M)		

令和6年度 学年別授業時数

区 分	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	
各 科	国 語	311	320	250	247	177	176
	社 会			70	90	100	105
	算 数	141	180	180	176	177	176
	理 科			90	105	105	105
	生 活	102	105				
	音 楽	68	70	60	60	50	50
	図画工作	68	70	60	60	50	50
	家 庭					60	55
	体 育	102	105	105	105	90	90
	道徳	34	35	35	35	35	35
学級活動	34	35	35	35	35	35	
総合的な学習の時間			70	70	70	70	
外国語活動			35	35	70	70	
小計 ①	860	920	990	1018	1019	1017	
児童会					13 1/3	13 1/3	
クラブ				12	12	12	
学校行事	14 2/3	13 1/3	13 1/3	13	25	29	
小計 ②	14 2/3	13 1/3	13 1/3	25	50 1/3	54 1/3	
小計 ①+②	874 2/3	933 1/3	1003 1/3	1043	1069 1/3	1071 1/3	

令和6年度の週時程表と学年別授業時数

天童中部小学校では5校時のみ60分授業としており、1日の5校時までの授業時数は5 + 1/3コマとなります。5年生を例にすると、授業日数が204日間のため、年間で実施可能な最大の授業時数が1088コマとなります。これに対して、各教科等の時数、学校行事の時数、5校時まで実施できないと想定する日（例：始業式・終業式、保護者面談日など）の不足分の時数を合わせ、必要な授業時数を1080コマと算定し、5校時までの時程で実施可能であることを確認しているそうです。

令和6年度 天童中部小学校 第5学年 年間授業時数		
6校時	児童会 クラブ	25 + 1/3コマ
1~5校時 実施可能な 最大の授業時数 1088 コマ 1日5時限 (5 + 1/3コマ) × 授業日204日	欠課	36コマ
	学校行事	25コマ
	各教科等	1019コマ (各教科 + 道徳・外国語科・総合的な学習の時間・学級活動)
		必要な授業時数 1080 コマ

令和6年度 第5学年 年間授業時数

このような授業時数の見直しと週時程の工夫により、子供の生活リズムを整えるとともに、教師がコンスタントに教材研究や授業準備に取り組める時間を確保しています。

令和4年度から天童市教育委員会の委嘱を受け、「自立した子供を育てる指導のあり方」について実践研究を重ねた天童中部小学校。そこで改めて見えてきたことは、「子供一人一人は違う」「違っているからこそ、その子らしく学び、その子らしく育つ」ということでした。子供の多様性を前提として教育活動全体を充実・発展させる挑戦は今も続いています。

6. 終わりに

天童中部小学校では、子供が学びのすべてを自分で決める「フリースタイルプロジェクト」等を通じて、子供一人一人の文脈に沿った「その子らしい」学びを実現し、「学び続ける子供」を育てる取組を積み重ねていました。取組を持続可能なものとするために、教育課程の見直しを通じて教師の「余白」を生んでいることも重要な要素となっています。

本記事が、全国の多くの先生方にとって、子供たちの多様性を前提に、子供たち一人一人にとって自分らしく学べる授業づくりにチャレンジするためのヒントになってほしいと願っています。

実践編⑧

学年に応じたステップで
課題発見・解決能力を育む！
福山市立福山中学校の挑戦

「好き」から始まる 「My探究」



【実践編⑧】「好き」から始まる「My 探究」

～学年に応じたステップで課題発見・解決能力を育む！

福山市立福山中学校の挑戦～

福山市立福山中・高等学校は、平成 16 年に開校した併設型中高一貫教育校です。中学校の「総合的な学習の時間」と高等学校の「総合的な探究の時間」とを接続させ、6 年間の探究学習のカリキュラムを編成し、一人一人の興味・関心に基づく学習を行っています。

本記事では、このうち福山中学校の「My 探究」の授業づくりから、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」のためのヒントを探っていきます。

1. 取組のポイントと経緯～「My 探究」とは？～

（1）「My 探究」の誕生と変遷

福山中学校では、令和 2 年度から 3 年度の 2 年間、広島県教育委員会の「個別最適な学び」を実現するための実証研究事業の指定を受け、探究学習の研究に取り組みました。この実証研究で、「自分たちが学びたいことを深めていきたい」といった子供の声を基に生まれたのが「My 探究」です。中学校の「総合的な学習の時間」のうち、学年に応じて年間 35～40 時間を「My 探究」に充てています。課題発見・解決能力の育成を目標に、子供一人一人が興味・関心のある探究テーマを設定し、年間を通じて継続的に探究活動に取り組んでいます。

一人一人の興味・関心に応じた探究といえども、実際には一人で問いの設定から課題の解決までを深めていくことは容易ではありません。そもそも実社会でも多くの人と協働しながら一つの目標に向かってチームで課題解決をしていくことも多いです。そのため、探究テーマが似ている複数の子供をグループにして「ゼミ」と呼び、ゼミ単位で探究を進めています。その一方、個で探究を深めたい子供がいれば、単独でのゼミも許容しています。

令和 5 年度は異学年で編成したゼミ形式でのグループ活動を実施していましたが、時間割を合わせることの難しさや上学年がリードし過ぎると下学年の学びが深まらないといった課題もあり、現在では 2・3 年生で学年ごとにゼミ形式でのグループ活動を実施しています。このように、学校や子供の実態に応じて試行錯誤

誤し、取組を柔軟に見直している点も同校の特徴です。

(2) 6年間を見通した探究学習

福山中学校では、1年生では子供一人一人の「好きなモノ・コト」を徹底的に探る探究学習を行います。そこでは、学校に適した椅子の形、バレーボールのサーブが入るコツ、紙飛行機はどこまで飛ぶか、勉強している時とゲームをしている時で時間の流れの感じ方が違うのはなぜかなど、子供の実生活に即した多種多様な問いに対する探究学習が行われます。そうした探究学習の中で、子供は問いや仮説の立て方、調査・実験の進め方、探究結果の効果的な発表方法等についても学んでいきます。

2・3年生ではこうした探究の基礎・基本を定着させつつ、学校・地域・社会と関わって「自分がやりたいこと」、よりよい学校・地域・社会にするために「自分にできること」といった視点で探究学習を行います。さらに高等学校では、地元企業と連携したりするなど、将来の夢や進路希望に応じた課題を探究していきます。

総じて言えば、中高の6年間を見通して、子供一人一人の「好き」からスタートし、自分と学校・地域・社会との関わりを深めながら自己の生き方につなげていけるよう、探究を深化させる設計となっています。

○中学校「My 探究」

1年生：自分の興味・関心を探る探究

2・3年生：学校・地域・社会とのつながりを考えた課題の探究

○高等学校「探究」

1年生：「地元探究」地元企業や団体の SDGs に関する取組の研究と課題解決

2年生：「夢プロ」自分の夢や興味・関心に応じた課題の設定と解決に向けた実行・検証

3年生：「課題研究」進路希望に関連する課題の設定と解決への貢献



福山中学校・高等学校 探究「各学年の取組」

2. 授業づくりのポイント～「My 探究」の軸は「自分のやりたいこと」～

令和6年度の「My 探究」は、具体的には次のような計画で進められています。

（１）１年生：自分の興味・関心を探る探究

- ①オリエンテーション（目標となる資質・能力の確認、年間の学習予定の見通し）
- ②自分の「好きなモノ・コト」から問いを立てる
- ③問いを探究するための計画・準備を進める
- ④問いを探究するための調査・実験、整理・分析、まとめるを行う
- ⑤自分の探究活動について最終発表する
- ⑥活動の振り返りをする（評価ルーブリックを用いて評価）

（２）２・３年生：学校・地域・社会とのつながりを考えた課題の探究

- ①オリエンテーション（目標となる資質・能力の確認、年間の学習予定の見通し）
- ②自分の興味・関心から学校・地域・社会に向けて、探究したい問いを考える
- ③探究したい問いが似た子供でゼミ（グループ）を作る
- ④ゼミの探究プロジェクト計画を立て、企画書を作成する
- ⑤ゼミの企画書に基づいて探究活動を進める
- ⑥中間報告と振り返りを行う
- ⑦振り返りを活かして探究活動を進める（※取材時）
- ⑧最終発表を行う
- ⑨活動全体の振り返りをする（評価ルーブリックを用いて評価）

こうした計画を実施していく上で、以下のポイントを意識した授業づくりが行われています。

- 学習指導要領に示された探究のプロセスに「実行（検証）」と「振り返り」を加えた福山中独自の探究プロセス（「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「実行（検証）」→「まとめ・表現」→「振り返り」）に沿って学習を展開する。
- 全学年でスタディサブリの探究講座を活用して探究プロセスについての基礎的な内容を学び、全ての子供に探究的な学びが実現するよう支援する。
- オリエンテーションにおいて、子供に身に付けてほしい資質・能力を伝えとともに、年間の学習予定の見通しをもたせる。
- 子供一人一人の興味・関心に応じた課題設定を大切にする。そのために、１年生では、自分の「好きなモノ・コト」から興味・関心を探り、問いを立てるプロセスを丁寧に指導する。２・３年生では「課題」の意味をおさえた上で、子供が学校・地域・社会に目を向けて問いを見いだすことができるようにする。
- １年生では、探究プロセスの各段階において練習の場を設け、探究の進め方そのものを丁寧に指導する。
- ２・３年生では、課題の内容ごとに数人で構成するゼミを結成する。また、子供が「個人企画書」や「ゼミの企画書」を作成することを通して、個人の活動が集団の中で生きるように支援する。

3. 実際の授業のワンシーン～「やりたいこと」に没頭する子供～

取材したのは、ゼミ形式で探究活動に取り組む3年生の「My 探究」。子供が企画書や年間計画表を基に、自分と学校・地域・社会とのつながりを考えて設定した思いのテーマについて探究する時間です。

子供は以下のような30近いゼミ形式のグループでそれぞれの探究活動を進めてきました。

[3年 My 探究テーマ一覧.pdf](#)

取材当日は、年間の探究活動の終盤。およそ1か月後に最終発表会を控えている時期でした。授業のはじめに教師が最終発表会までの今後の予定とこの日の活動内容を確認すると、子供の活動がスタートしました。子供の活動場所となっている複数の教室はすぐに活気に溢れました。



教室の後方で4人のグループが、ペットボトルと針金を使って斬新な紫陽花のオブジェを制作していました。環境保護のため、「捨てるはずのペットボトルを再利用できないか？」という子供の問いから出発し、再利用の可能性を模索した結果生まれた活動です。制作に当たっては、針金の加工方法をICT端末で調べ、針金を火であぶって加工するなど様々な工夫を重ねたようです。この作品には、ただ美しいだけでなく、「廃棄されるはずのペットボトルが新たな価値に変わる」という環境保護のメッセージが込められています。完成したオブジェは校内に飾り、作品を通じてリサイクルの重要性や環境への配慮を訴えます。

「My探究」企画書			
メンバー（組・番号・名前）			
チームで探究したいこと もつくりを通して環境問題対策を広めること ・ ペットボトル、トイレペーパーを再利用して、小物を作って、ポストや机の上などに飾る。 ・ トイレに、トイレペーパーを再利用して、ポストや机の上などに飾る。			
探究内容のカテゴリーに○をつけよう。			
大きな	A 生活環境（ハード面）※設備、道具など形のあるもの	B 生活環境（ソフト面）※時間、意識、情報など形のないもの	C 情報発信
小さな	D 地域とつながる	E 社会問題（貧困、環境問題など）	
ものづくり（イラストなど含む）	g 植物、花、野菜	h 食品	i 校内・校外美化
j 交通安全	k 犯罪抑止	l 動物	m 市立の魅力
n 活動・イベントの企画	o 健康	p その他（ ）	
ゴールイメージ 生徒が環境問題に関心をもち、「対策しよう」と思ってもらえるよう学校行事や私生活でも環境問題に対策する身にならねばならないようにする。			
プロジェクト名 環境問題に立ち向かえ！！			
ゴールイメージを実現するために必要な「もの」「こと」「人」…… 思いつくものを全て書き出してみよう。 ・ ペットボトルを回収し、上部部分を捨て、風鈴や小物を作る。 ・ リユースには、無料で配布する。（紙おむつや、トイレペーパー等、（ペットボトル、マシク、ビニール、紙、テープなどが必要）） ・ トイレに、トイレペーパーを無断使用し、ポストや机の上などに飾る。→ 自分たちで力を合わせて環境問題対策をサバゲ（紙、デネット、画材） ・ もつくりを通して、廃材をリユースして、環境問題対策を呼びかけ、環境問題			

ペットボトルを使った紫陽花オブジェ制作グループの「My 探究企画書」



顔を突き合わせ大きな模造紙に文字を書き込んでいたのは、「先生のお薦めグルメマップ」を作成するグループです。福山市の地図を描き、そこに校内の先生方からインタビューで聞き取ったお薦め飲食店の情報を書き込んでいきます。市内の飲食店の情報を全校に提供することで、地域を盛り上げようとしています。まだまだ情報が不足しているようで、今後のインタビュー計画について話し合っていました。



大きな白い箱のようなものを作っているグループがありました。作っていたのは、飲み終えた牛乳パックを入れるゴミ箱です。普段の学校生活の何気ない一コマに着目し、牛乳パックを捨てる作業をよりスムーズにし、快適な時間にしたいという思いが出発点になっています。ICT 端末を活用して事前にアンケートを行い、学年の友達から「使いやすいゴミ箱」についての意見を集め、ゴミ箱の設計に活かしています。また、大掛かりな制作のため、作業面で技術的に分からない場合には、ICT 端末で調べながら作業していました。



地域の川をきれいにしたいという願いをもったグループは、実際に学校近くを流れる河手川の清掃活動に取り組みました。清掃活動を通して川を美しく保つことの重要性にあらためて気づき、川の美化を呼び掛けるポスターを作りました。このポスターをどこに掲示し、どのように P R すると最も効果的なのか。探究は続きます。



机に手作りのしおりを並べて話し合っていたのは「市立雑貨店」のグループです。学校で採れた花を使って押し花のしおりを作成しました。学校を訪れる人にしおりなどの雑貨を無料配布する予定です。訪れる人に少しでも喜んでもらうことで、「人と学校」をつなぐ役割を果たしたいと願って活動を進めていました。



活動が早く進んでいる子供たちは、この時間から最終発表会に向けたスライドづくりに取り組んでいました。スライドは個人で作る子供もいれば、共同編集機能を活用してグループのメンバーで協力して作る子供もいました。

この他にも、交通ルールを周知するための交通安全クイズを作る子供、いらなくなった衣類をリメイクして清掃道具を作る子供、食物アレルギーのある人でも食べられるお菓子について研究する子供、自然環境に優しい腐葉土を作って植物を栽培する子供、先輩が作った学校のマスコットキャラ「いちかちゃん」の魅力を伝えようとする子供などなど。どのグループの子供も学校・地域・社会に対する思いや願いをもち、目的意識をもって活動に取り組んでいました。各教室で子供の多様な活動が繰り広げられ、およそ 90 分間の探究の時間が終わりました。

※授業ハイライト動画（「note」に掲載）

4. 授業づくりのポイント～授業＆小野教諭ほかインタビューより～

（１）子供一人一人が「自分の課題」を決める意義

多種多様な探究テーマは、子供一人一人が自分で決めたものです。子供は 1 年時に自分の「好きなモノ・コト」から問いを設定する経験をしています。2 年生の探究のスタート時には学校・地域・社会に目を向

けて課題を見いだす経験を積んでいます。これらの経験を基に、3年時では「“だったらいい”を探る」という視点で自分の生活と学校・地域・社会とのつながりをさらに深く見つめ、自分なりの課題を見いだしてテーマを設定しています。課題意識が明確だからこそ、「何のためにやるか」「どんなことをするか」「どのように進めるか」「何が必要か」「誰を頼るか」といったことを主体的に考えることができますといいます。まさに、「学習の個性化」が図られているのです。

こうした学びの中で、子供は課題発見・解決能力を身に付けていくとともに、何よりも、自分の思いや願いを形にできる喜び、学ぶ楽しさを実感します。ペットボトルで紫陽花のオブジェを作った子供が、授業後に校長室を訪れ、自分たちの活動の意義について熱く語っていた姿がそのことを象徴しているように感じました。

（２）個が生きる、ゆるやかな協働

2・3年生の授業で採り入れられているゼミ形式の活動は、単なるグループ活動ではありません。ゼミは内容の近いテーマの子供で結成していますが、あくまでも一人一人のテーマを基に、グループで探究したいことやゴールのイメージを共有します。2～4人ほどで構成されるゼミでは、一人一人が個別に活動するグループ、役割分担をして進めるグループ、全員一緒に一つのことに取り組むグループなど、様々な進め方がありました。そして、これらの活動の進め方も子供自身が考え、決めています。「グループありきでは、テーマ設定に制約がかかり、学びの責任が不明確になりがち。まずは個でやってみて、必要に応じて仲間と協働する形が自然」というのが、福山中学校の基本的な方針です。「My 探究」においては、集団の中で個が埋没することがないように特に配慮しているそうです。

そうした中で、探究活動が進むにつれて子供の協働性が高まるようで、授業では多くのゼミでメンバーが活動を共にしていました。子供は互いのアイデアを共有し、異なる視点を取り入れながら活動を広げ、学びを深めます。ゼミ形式の学習形態は、個別の学びと協働的な学びを柔軟に行き来する仕掛けとなっています。

（３）子供の探究を支える教師の役割

教師の支援は、「課題発見・解決能力を育む」という目標の下で一貫しています。授業中、教師は子供の活動の様子を見取りながら「問い掛け」と「提案」を行い、活動に行き詰まった子供が次の方向性を自ら見いだすことができるように支援していました。「最後に選択・決定するのは子供」「一人一人のそれまでの学びのプロセスを踏まえた支援」を大切にしているといいます。

また、探究計画の立案に際して、子供だけでは探究を進めるのが困難な壮大な計画や費用のかかる計画などがあった場合は、教頭先生などが「関所」の役目を果たします。子供は教頭先生などに対して計画についてプレゼンを行います。教頭先生は子供の思いや願いを大切にしつつ、問題点に気付かせて計画の修正を促しています。

さらに、家庭から持参したいものがある場合や校外で活動したい場合は、「My 探究申請書」を提出する仕組みになっています。この他にも、企業と連携する際は自分たちで連絡を取ること、費用がかかる場合は基本的に自分たちで調達することなど、ルールを明確にして子供の創意あふれる活動を支えています。

My 探究申請書	
申請者名	
プロジェクト名	
持参日、期間等	※長期間持参等する場合は、1 か月ごとに申請すること。
持参物（何を何個持参したいのか、具体的に）	使用したい場所（特別教室、外、校外など）
持参方法（どれかに○をする。）	
自分、親、その他（ ）	
持参理由（何のために、どのように使用するのか）	使用理由（何をするために使用したいのか）

※1週間前の16:50までに担当の先生に提出をしましょう。

「My 探究申請書」

5. 学校全体で取り組むポイント～協谷校長・平山教頭ほかインタビューより～

「My 探究」のある毎週火曜日を楽しみに登校する子供がいるほど、福山中学校の子供は「My 探究」に前向きに取り組んでいます。もちろん、子供の自由度が高いからこそその課題も生まれます。「本当に探究として成立しているのかどうか、日々悩んでいる」という先生方のリアルな声も聞かれました。そうした課題に直面するたびに、「探究はサイクルを回す中で成長するもの。完璧にやれないのは当たり前」という前提をもち、子供の学びを充実させる手立てを考えるそうです。福山中学校の「My 探究」は、子供一人一人の「好き」「やりたい」を引き出し、それを学校として受けとめようとする姿勢が最大の特長と言えます。

また、連携関係にある地元の大学から講師を招き、探究学習に関する研修を継続的に行っています。「探究」を探究する、学び続ける教師集団によって「My 探究」のカリキュラム開発が行われ、毎年少しずつ進化を遂げています。

中学校段階で自分の興味・関心を探り、学校・地域・社会とつながる自分なりのテーマを設定して試行錯誤を重ねる経験は、高校・大学・社会へと続くキャリア形成の大きな原動力となるはずです。

6. 終わりに

福山中学校では、中高一貫校の特色を生かして6年間を見通した探究学習のカリキュラムを編成し、子供一人一人の興味・関心を大切に「My 探究」の実践にチャレンジしていました。「My 探究」は、子供の課題発見・解決能力を育むとともに、子供の個性的な学びを実現し、学ぶ楽しさや喜びを提供する取組と言えます。

本記事が、全国の多くの先生方にとって、子供の興味・関心を生かした学びの実現に向けてチャレンジするためのヒントになってほしいと願っています。

実践編⑨

生徒一人一人の思いを生かした探究により、
社会に必要とされる資質・能力を育成する！
山梨県立笛吹高等学校の挑戦

地域と共に、 地域の課題を解決する 「笛吹グローバル」

【実践編⑨】 地域と共に、地域の課題を解決する「笛吹グローバル」 ～生徒一人一人の思いを生かした探究により、 社会に必要とされる資質・能力を育成する！山梨県立笛吹高等学校の挑戦～

山梨県立笛吹高校は、普通科、食品化学科、果樹園芸科、総合学科（環境・緑地系列、情報・観光系列、国際文化系列、人間科学系列）の4学科よりなる総合制高等学校で、それぞれの学科の特性を生かした多様なカリキュラムを編成・実施しています。令和5年度からは教科横断 STEAM 型の新教科「笛吹グローバル（以下 FF グローカル）」を設定し、地域社会とのつながりや協働を軸にした探究的な学びを実践しています。グローバルとは、「グローバル」（国際）と「ローカル」（地域）を組み合わせた造語で、グローバルな視点で地域を盛り上げる探究を目指すという思いを表しています。

本記事では、「FF グローカル」の探究学習を取り上げ、授業実践やインタビューから、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を図るためのヒントに迫っていきます。

1. 取組のポイントと経緯～「FF グローカル」とは？～

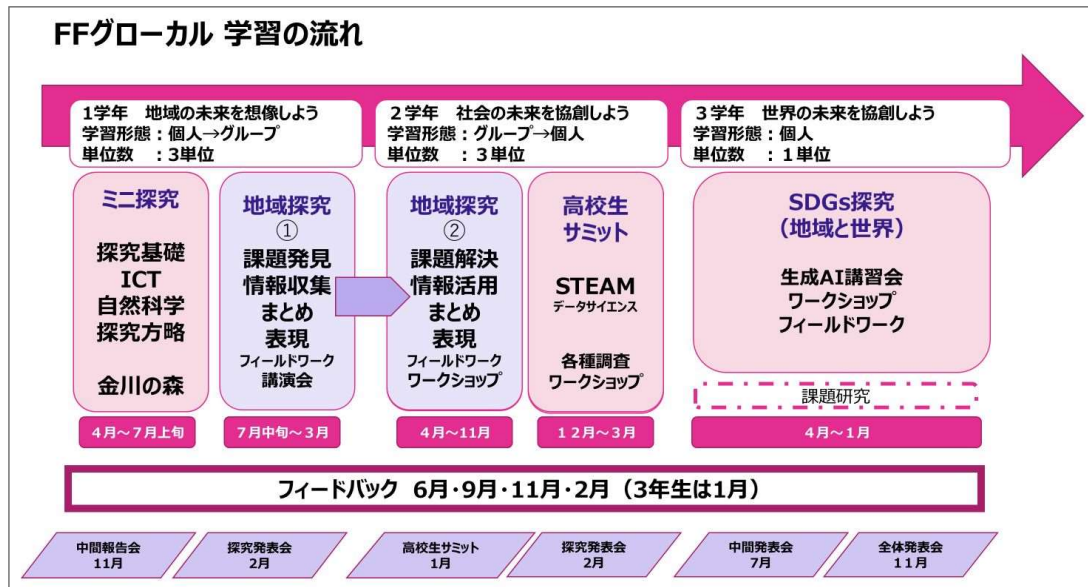
（1）「FF グローカル」が目指す学び

「FF グローカル」は、令和5年度から文部科学省の研究開発学校の指定を受けて設定した教科横断型の新教科です。地域社会との対話や協働を軸にした探究的な学びを通して、学習の基盤となる資質・能力としての言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力、および主体的に学習に取り組む態度の育成を目指しています。

そのために、普通科、食品化学科、果樹園芸科、総合学科それぞれの特色に応じて、「総合的な探究の時間」に「生物基礎」、「科学と人間生活」、「農業と情報」、「情報Ⅰ」を組み合わせ、生徒一人一人に応じた個別最適な学びが実現できるカリキュラム開発を行っています。教室で学んだ基礎的な知識・技能を地域というフィールドで実践し、地域の人々をはじめ多様な他者と協働して主体的に実社会にかかわる課題を解決しようとする探究的な学びの実現を目指しています。笛吹高等学校では、研究開発学校の仕組みを活用してこれを新設教科として研究を行っていますが、総合的な探究の時間や学校設定教科・科目の活用により、十分に他の高等学校でも取り組むことができる実践です。

（２）３年間の探究デザイン

グローバルな視点で地域（ローカル）をとらえた探究的な学びを実現するため、各学年における探究の対象やフィールドを「地域」「社会」「世界」と段階的に広げていく学びを次のように設計しています。



FF グローカル 学習の流れ

○ 1 学年：探究課題「地域の未来を想像しよう」

前期：自然科学分野を対象にして基礎的な探究方略を学ぶ「ミニ探究」を実施する。

後期：「ミニ探究」の学びを基に、地域の課題の解決に向けて探究のサイクルを回していくことに重点を置いて学ぶ「地域探究①」を実施する。

○ 2 学年：探究課題「社会の未来を協創しよう」

前期：「地域探究①」に引き続き、地域の課題について、探究のプロセスを意識しながら学ぶ「地域探究②」を実施する。

後期：「地域探究①」「地域探究②」を基に、地域社会の未来を見据えて、探究の成果を語り合う「高校生サミット」を実施する。

○ 3 学年：探究課題「世界の未来を協創しよう」

年間：SDGsの視点から地域社会へ貢献する課題を探究する「SDGs 探究」を実施する。

これらの活動と並行して、「ICTの活用例」「情報とメディアの特性」「情報モラルと著作権」「グラフの作成」「効果的なプレゼンテーション」など、情報の活用に関する学習内容を計画的に配置し、探究のサイクルにおける各段階に関連付けて指導できるよう計画されています。

2. 授業づくりのポイント～地域を学ぶ、地域で学ぶ、地域と共に学ぶ～

取材した1年生では、令和6年度前期の「ミニ探究」において、身近な自然を題材にして探究テーマの設定の仕方や科学的探究の進め方、効果的なICT活用の仕方など、探究学習を進める上での基礎的な内容を学びます。これらの学びを基にして、後期の「地域探究④」では次のポイントで学習を進めます。

①「地域探究①」を通して生徒に身に付けてほしい資質・能力を5段階で具体的に設定し、評価基準をルーブリックとしてまとめる。また、学習のスタート時に生徒にルーブリックを共有するとともに、活動の節目においてルーブリックを活用して評価基準を基にした振り返りを促す。

②地域の専門家（大学や専門学校の教員、市役所職員、NPO 法人代表、民間企業職員、脚本家など）が講師を務める多種多様なワークショップを開き、生徒の興味・関心を掘り起こす。

〈ワークショップのテーマ例〉

水、森の自然、防災、考古学、地域活性化、情報の扱い方、鳥獣害、商品開発、建設、移住定住、メタバース、AI デマンド交通、高齢者福祉、脚本の書き方

③生徒個人の興味・関心に関するアンケートを基に複数の探究分野を設定し、さらに興味・関心の近い生徒同士でクラスや学科を超えてグルーピングする。（令和6年度は「歴史・文化」「自然」「防災・工学」「国際情報」「経済・観光」「食・栄養」「福祉」「スポーツ」の8分野に分かれ、合計47グループ。）

分野	探究テーマ(設定課題)	分野	探究テーマ(設定課題)
歴史・文化	・美和神社の歴史に関する調査 ・笛吹市の道祖神の分布と地域との関わり ・御坂路(鎌倉街道)の歴史とルート探索 ・金川の森周辺の古墳を調べる	経済・観光	・芦川での移動販売を行う ・笛吹市や山梨への移住・定住者を増やす ・みさかの湯のお客さんを増やす ・山梨への観光客に楽しんでもらうには
自然	・金川の森に虫の分布表を作る ・金川の森を自然豊かな森にするには ・学校周辺の川はきれいなのか ・笛吹市内の鹿はどのような影響を与えているか	食・栄養	・アレルギーのある人でも食べられる給食をつくらう ・すべての子供が大人になれるための食・栄養 ・食べることに罪悪感のない甘いお菓子をつくる ・出荷できない規格外の果物を商品化するには
防災・工学	・小学生に向けた地震に関する動画作成 ・火災発生前の対策と発生後の対応 ・富士山噴火時の被害とその対策 ・誰もが使用できる防災グッズを作成しよう	福祉	・バラスポーツを多くの小中学生に知ってもらうには ・高校生と高齢者が世代を超えて関わるには ・知的障害をもった子供たちを笑顔にしたい ・すべての人が介護サービスを受けるには
国際情報	・外国人向けの温泉案内パンフレットを作ろう ・笛吹市の観光スポットの魅力をSNSで発信 ・笛吹市内に商業施設を建てるためには ・日本や地域の伝統文化の衰退とこれから	スポーツ	・子供たちの運動不足・体力低下を改善するのは ・外遊びする子供を増やす方法 ・未経験者を対象に野球教室を開こう ・バレー人口の低下について考える

令和6年度「FF グローカル I」分野別探究テーマ（設定課題）例

④生徒はグループごとに課題設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現といった探究活動を進める。特に課題設定では、身近な地域についての問いを重視し、フィールドワークを含めた様々な調査を十分に行って決定する。

⑤グループの探究活動の進捗を伝え合う中間発表会を設け、生徒は聞き手からのフィードバックを生かして活動のブラッシュアップを図る。また、活動の最後には全体発表会を行い、それぞれのグループの探究活動から学び合い、次年度の「地域探究②」に活かす。

⑤「地域探究①」を通して、協力してもらっている多くの地域関係者・関係団体からの助言をもらい、活動の改善を図る。

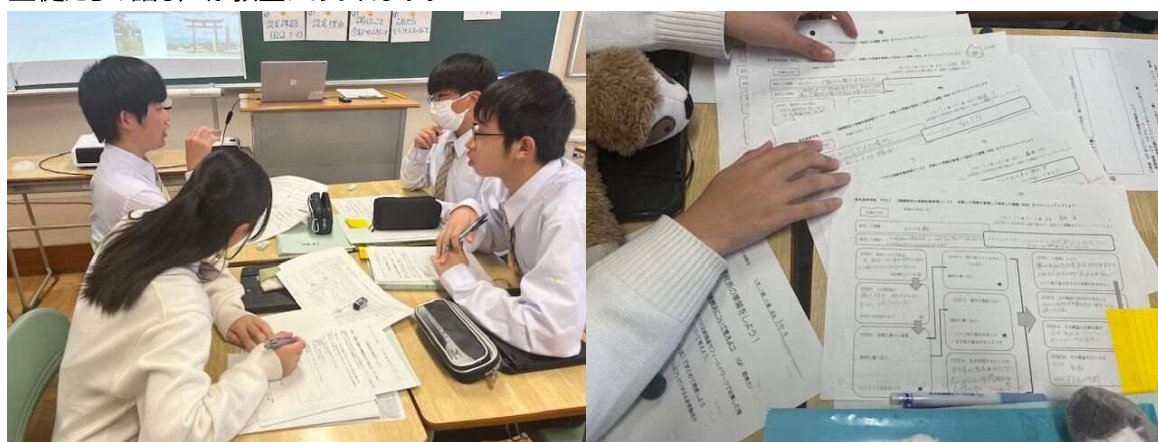
3. 実際の授業のワンシーン～一人一人の思いを地域貢献につなげていく生徒たち～

取材したのは、1年生「FF グローカルⅠ」の「地域探究①」。7月からスタートした単元の間地点です。生徒は探究分野ごとにいくつかのグループに分かれ、分野別探究活動を進めてきています。この日はおよそ2週間後に控える中間発表会に向けた準備に取り組む時間でした。

中間発表会は、発表のみを目的とするのではなく、発表準備のために自分たちの活動を振り返ったり、他グループの探究の進め方を参考にしたり、他グループの生徒や教員から発表に対するフィードバックをもらったりすることで、探究活動の質を高めていくことをねらいとしています。

この教室は、「歴史・文化」分野のグループです。授業が始まると、原田教諭がこの時間の目標や活動手順等を説明します。この日の目標は、収集した情報から課題解決について考えること。中間発表会に向けて、それまでの文献調査やフィールドワークで収集した情報をグループ内で共有したり整理したりしながら、自分たちのそれまでの活動を振り返り、課題の解決に向けた方向性や方策を考える時間です。原田教諭は情報の共有に際しては、「情報の出どころが明確か」「収集した情報をもとに自分の考察があるか・多面的に考察しているか」といった点に留意することを生徒に伝えました。

原田教諭の説明が終わり、生徒はグループワークを始めます。生徒たちはグループでの活動を進めてきましたが、一人一人が独自に調査した情報もあります。それぞれがもち合わせている情報を共有しようとする生徒たちの話し声が教室にあふれます。



それぞれが収集した情報を伝え合う生徒たち

情報が蓄積されたワークシート

情報共有を終えると、生徒はグループの探究活動について整理する活動に移りました。この日は、中間発表会に向けたスライド作成も見据え、KP法（紙芝居プレゼンテーション）の手法を使って、各グループで「①設定課題（テーマ）」「②設定理由」「③これまでの活動内容や収集した情報」「④これから取り組もうとしていること」について整理し、簡潔にまとめます。

あるグループでは、次のように自分たちの活動を整理しました。

- ①テーマ：地域の伝統文化として、二宮地区の美和神社を大切にしたい
- ②理由：地元の神社なのに美和神社のことはあまり知られていない
- ③情報：美和神社に関する個人調査とグループでの訪問などを通して、おみくじや神楽などについての情報を収集した

④今後：美和神社の神楽を継承するためにできることを考える

このグループは、地域の歴史や文化に関心を持ち、地元の神社に着目してその歴史について調べてきました。生徒たちには、この神社のことを詳しく調べ広めることを通して、地域の神社を大切にしていきたいという思いがあります。しかし、これまでの活動で由緒ある神社に関して様々な情報を得るものの、神社を大切にしていくための具体的な方策は明確になっていませんでした。この日のグループワークを通して共有された情報の中で、生徒たちは神社に代々伝わる神楽の舞に注目します。神楽は現在、保存会が結成されていますが、その存続が危ぶまれているそうです。生徒たちは、神楽の存続・継承のために、自分たちに貢献できることはないか考え出します。これまでの活動を通して得てきた情報を持ち寄り、これから取り組みたいことが見えてきたのです。



今後の探究の方向性について語り合う生徒たち

別のグループでは、学校のすぐ近くを通る御坂路がかつて鎌倉街道だったことに興味を持ち、その歴史調査やルート探索に取り組んでいました。意欲的にフィールドワークを重ね、これまでにたくさんの情報を収集していました。そして、旧街道の道沿いに神社や城跡、大小様々な道祖神や石仏などが点在していることが分かり、街道のルートがはっきりしてきたそうです。また、市役所の方から明治時代の街道の写真も見せていただき、昔の街道が要路として栄えていたことを知ります。このような活動を通して、今ではすっかりその姿を変えてしまった街道の存在を知ってほしいという願いをもちました。この日の授業では、グループ内での話合いの末、自分たちが調査で知り得た情報の全てをまとめた「鎌倉街道探索マップ」をつくることに決まりました。

この後、各グループのミニ発表を行い、これまでの活動内容や今後の方向性に対して複数の教師が丁寧にフィードバックして、授業を終えました。

授業から2週間後―。中間発表会では、分野ごとに各グループでの探究活動を発表し合い、生徒同士で意見交換をしたり、メンターと呼ばれる地域の専門家から活動に対する助言をもらったりして、今後の改善策を考えました。「福祉」分野で「知的障害のある子供たちを笑顔にしたい！」というテーマで探究を続けてきた生徒は、発表会の振り返りで次のように記述しています。

「福祉をテーマにしている各グループは別々のことをやっているが必ず関連がある。障害のある人と関わることは身近なことで、その時にどのような関わり方がよいかを考え、みんなに伝えることができたらいいなと感じた。

『心のバリアフリー』を大切にして、『笑顔にするとは何か』を追究していきたい。」



「Smile Children」グループが中間発表会のために作成したスライド資料

中間発表会を経て、生徒は自分たちが設定した課題の意味をより深く見つけ、さらなる探究への意欲を高め、次の探究サイクルを回していきます。

4. 授業づくりのポイント～授業&原田教諭・木下教諭・廣瀬校長インタビューより～

(1) 個と協働が有機的につながる学びのデザイン

グループ内で設定した課題であっても、生徒一人一人の関心や着眼点、課題に迫る方法は様々です。「FF グローカル」のグループによる探究では、そのような生徒一人一人の個性的な追究を保障しています。それは、地域の中で課題を発見し、「自分ごと」として追究する中で、主体的に学び続ける姿勢や粘り強く問題を解決していく力を育むことができているからです。

一方で、原田教諭が「自分だけの『やりたい』で終わらず、だれかの課題、みんなの課題を解決できるかを考える。地域の人と関わる中で、少しずつ自分ごと化が進み、探究心に火がつく瞬間があるんです。」と語るように、「FF グローカル」では、他者と協働して学ぶことも大切にしています。だからこそ、個々の学びが集団の中で生かされるような活動が設定されています。取材した授業でも、生徒が個々に集めた情報を共有する場を意図的に設け、それらの情報の信頼性などを吟味しつつ、課題解決に向けて情報を活用する授業デザインとなっていました。生徒同士の話し合いにより、様々な情報や意見が練り上げられ、各グループでは今後の方向性や活動内容が決まってきました。

長期にわたる探究学習の中で、生徒一人一人の学びと集団による協働的な学びのどちらも大切に、互いの学びが有機的につながるよう、単元全体を意図的・計画的にデザインしているのです。

(2) 資質・能力を意識させるルーブリックとフローチャート

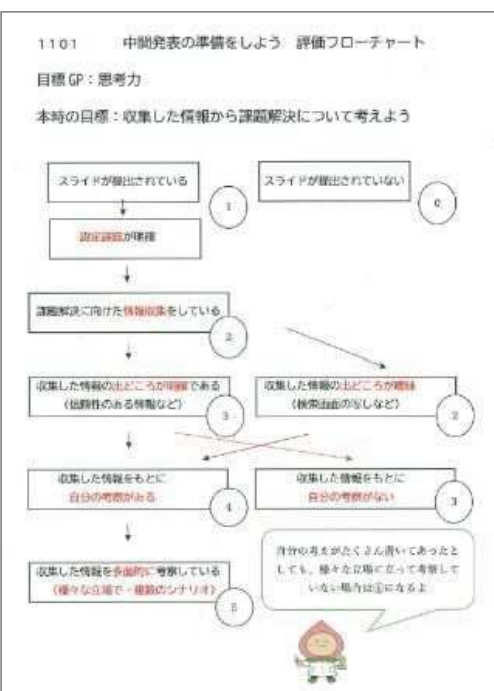
「FF グローカル」では、生徒に身に付けてほしい資質・能力を「主体的に学習に取り組む態度」「思考・判断・表現」「知識・技能」の観点ごとに5段階で設定しています。1年生は5段階のうち「3 合格」を目標に設定しており、取材した授業では、「思考・判断・表現」における「課題解決に向けて集めた情報を吟味しながら考察している」が目指す姿に当たります。この評価ルーブリックを生徒に共有するとともに、折に触れて生徒が目標を自覚できるように促しています。

FFG 評価ルーブリック			
	主体的に学びに向かう態度	知見・知識・技能	別視点・陸観
5 素晴らしい	地域の課題について、自分の食生活と地域の特性を生かしながら、対応と協定を遂行して、課題を解決しようとしている。	- 課題解決に向けた具体的な情報について、その信頼性を検証し、比較したり調べるだけでなく、分りやすい。 - 課題解決の実践について、様々な立場から立てて検討しながら、自分たちの思いが伝わるよう工夫しやすく表現している。	地域の課題について、豊富な情報で特色を可視化しながら高次元で整理し、ITを活用してより正確な情報を収集しながら、学際的な解決策を講じて、その取り組みについて改善案を出していることができる。
4 良い	地域の課題について、地域の特色を生かしながら、対応と協定を遂行して、課題を解決しようとしている。	- 課題解決に向けた集めた情報について、その信頼性を検証し、関連付けながら活用している。 - 課題解決の実践について、自分たちの思いが伝わるよう工夫しながら、わりとよく表現している。	地域の課題について、豊富な情報で特色を可視化しながら高次元で整理し、ITを活用してより正確な情報を収集し、活用してその解決策を講じて、その取り組みについて改善案を出していることができる。
3 普通	地域の課題について、出会いに対応を怠りながら、課題を解決しようとしている。	- 課題解決に向けた集めた情報について、その信頼性を検証し、必要に応じて参考している。 - 課題解決の実践について、わりとよく伝わるよう工夫しながら表現している。	地域の課題について、豊富な情報で特色を可視化しながら高次元で整理し、ITを活用してより正確な情報を収集し、活用してその解決策を立てることができている。
2 もう少し	地域の課題について、自分で考え、解決を図ろうとしている。	- 課題解決に向けた情報例について情報収集している。 - 課題解決の実践について求めている。	地域の課題について、ITを活用して情報を収集し、解決策を立てることができている。
1 かなりの差を要する	地域の課題について考えようとしぬい。	- 課題解決に向けた情報収集を怠ることができない。 - 課題解決の実践について求めている。	課題とその解決策を思い出すことができない。



3年間通してのルーブリックです。

FFG I では「3(合格)」を目標に探究活動を促進します。



評価ルーブリックと評価フローチャート

ループリックに加えて、活動ごとに生徒自身が学習状況を自己評価できるよう、評価フローチャートも作成し、学習場面に応じて生徒に配付しています。これにより、生徒は「どんなことができればよいか」を意識して学習を進めることができます。

3年間を見通したおおまかな評価ルーブリックと、本時の目標や活動内容に応じた具体的な評価フローチャートにより、生徒は常に自分の学習を点検・調整しながら、探究の質を高めることができます。

（３）地域の人材のフル活用

「FF グローカル」では、地域を探究のフィールドにするとともに、多くの地域人材の協力を得ています。令和6年度の「地域探究①」のスタートに当たっては、様々な分野で専門性を有する地域の方が講師となり、14種類ものワークショップを開催しています。幅広い内容でワークショップを開催することで、生徒の興味・関心を掘り起こし、生徒一人一人が納得して自らの課題を設定することにつながっています。

また、フィールドワークや中間発表会、イベントの際に助言をしてくれるのだそうです。教師の役割はもちろん重要ですが、地域の方からのコメントを集めて生徒へフィードバックすることで、個々の探究の質が高まるといいます。また、地域の方から認められる機会を積み重ねることで、自分たちの活動の価値を自覚するようになり、生徒たちの学が意欲と自信もぐんと高まるのだそうです。

(4) 3年間を通じた生徒たちの変容

1年生の間は、探究のサイクルを回すことに精一杯で、まだまだ「やらされ感」が残ります。テーマの設定も、「なんとなくやりたい」という気持ちからスタートする場合がありますが、実際にフィールドワークで地域に出て、多くの課題当事者と話をする中で、「自分がやりたい」だけではうまくいかず、生徒はモヤモヤするといいます。しかし、そうした過程を経て、「自分がなんとなくやりたい」を超えて、「地域の誰かのために何かをしたい」という気持ちが芽生え、徐々に自分たちの探究の意義が深まり、本当の意味で「自分がやりたい探究」に変化していくといいます。

探究のサイクルを多く回し、地域のたくさんの方からフィードバックを受ける中で、褒められたり、認められたりして自分の良さを自覚し、また次の探究へのモチベーションが高まるという良い循環が生まれていきます。こうしたサイクルを早く生み出すために、1～2年生はグループでの探究が中心となりますが、3年生は個人探究が中心となります。

3年生では新たに生成 AI について学ぶとともに、今までの探究活動と自らの生き方・在り方を結び付けていきます。生成 AI をどのように使いこなせばよいか実践的に学び、これからの社会において必要不可欠な情報技術を身に付けます。そして、SDGs を手掛かりに、世界の課題と今まで探究してきた地域の課題がどのようにリンクするかを考え、自分たちが世界のウェルビーイングに貢献する具体的な方法について探究します。

5. 学校全体で取り組むポイント～廣瀬校長インタビューより～

笛吹高等学校は、農業科の山梨園芸高等学校と普通科の石和高等学校を統合してできた学校です。このアイデンティティーを基に、特色ある学校づくりの中核に据えたのが「FF グローカル」の探究学習だったと廣瀬校長は語ります。

「FF グローカル」を成立させている大きな要件の一つに、地域との強固な連携が挙げられます。地元市役所や NPO 法人、民間企業などを含めた 43 の団体が生徒の学びをサポートする体制となっています。こうした体制の下、地域の方に連続的、継続的に関わってもらうことで、生徒が地域の中で認められていると感じることに大きな意義があるといえます。アンケートで「地域に興味がある」と答える生徒の割合は 98 パーセントになったそうです。

また、実際に学びをデザインする教職員集団の風土も重要と考えています。「生徒の主体性や探究心を伸ばすには、教員こそ探究心を持って学ばないといけない」こうした思いが共有され、ある先生が得た知見を別の先生がすぐ実践し、また別の教員へと波及するという好循環が生まれました。外部講師による研修やワークショップも年間複数回実施し、生徒の探究を導く教師の力量形成にも力を入れています。廣瀬校長は語ります。「『探究』はまだ始まったばかり。でも、だからこそ教員自身も学び、探究し続けることが生徒の未来を拓くのです。」

学校と地域が一体となって進める「FF グローカル」の進化は、現在進行形です。

6. 終わりに

笛吹高等学校では、特色ある学校づくりの中核として、地域社会とのつながりや協働を軸にした「FF グローカル」の実践研究に取り組んでいました。探究の対象を地域から世界へと広げ、個別の学びと協働の学びのどちらも大切にしたい 3 年間の学びの中で、社会に必要とされる資質・能力を生徒に育む挑戦を続けています。

本記事が、全国の多くの先生方にとって、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を図り、子供たちの探究的な学びを実現していくためのヒントになってほしいと願っています。

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」のためのサポートマガジン『みるみる』
(令和6年度「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」のための指導の手引き開発事業)

発行 令和7年4月(「note」オンラインマガジン公表)

文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室

〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2

TEL : 03-5253-4111 (代表)

E-MAIL : kyokyo@mext.go.jp

編集 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室

株式会社 先生の幸せ研究所